

日本の英語教育は現在大きく変わろうとしている。小学校3年生からの英語導入、5年生からの教科としての英語導入、中学校において英語の授業を基本的に英語で行うことへの発展、そして、何よりも大きな変革は、大学入試の4技能化の推進だろう。次期学習指導要領においては、**Active Learning**が教育方法の根底に位置し、それによって身につけるべき学力の3要素として、(1)基礎的・基本的な知識・技能、(2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、そして、(3)主体的に学習に取り組む態度の育成が挙げられている。これは、全ての教科について言われていることだが、特に、英語教育の場合は、**CAN-DO**を学習の達成指標として設けることにより、単なる知識としての英語学習から英語を使って思考し、発表し、人とコミュニケーションするという**Active Learning**の実践が目的とされている。また、内容的には、単なる「言語」としてでなく、他教科や身の回りの世界、そして広くは国際社会を視野に入れた内容について英語で考え、発表し、議論できることが求められているのである。

このような中で、本号では、中高生の英語の授業が実際どのように行われているかについて、調査研究の結果を基に議論されている。その中でも、やはり生徒は授業や授業外でも英語を実際に使う機会を持つことにより、英語力をつけること、また、英語に対する好意的な態度が育成されることが判明した。教師は、生徒が英語に触れる機会をできるだけ多く設ける必要があることが示唆されるのである。また、教室における英語を使った授業の在り方について調べた研究では、教師の一方的な講義ではなく、生徒との対話を通して行われた授業が、授業内容の理解と獲得にとって最も重要であることが示されている。また、一般には、文法などの言語形式が英語の学習に最も重要であるかのように言われることがあるが、慣用表現などの**Formulaic**表現が、特に初期においては意味伝達に大きな役割を果たしていることが論じられている。

更に、内容重視の外国語教育の方法として、**EMI(English Medium Instruction)**が取り上げられることがよくある。その具体的な形としては、アメリカ中心に発達した**Content-Based Instruction**やヨーロッパで盛んに行われている**CLIL(Content and Language Integrated Learning)**などの考え方があがるが、これらは具体的な「教授法」ではなく、より一般的な内容を重視した外国語教育の「考え方」である。教授法というと、どうしてもそれによって提示された枠内でしか教えられないように思われるが、**Approach(考え方)**の場合は、基本的な考え方が支持されていれば、具体的な教授法は状況によって変わるのが当たり前ということになる。ちょうど、**Communicative Approach**が現代外国語教育の中心的な考え方でありながら、その実現方法は具体的状況によって変わる、ということと同じなのである。

上記以外にも、本号では、日本人幼児の英語習得のケーススタディ、語彙習得を**ECF**の理論的枠組みを用いて論じたもの、そして、ライティングの評価方法とライティング教育の関係について論じたものなどが掲載されている。

ARCLEも10年を迎えたが、その間、絶えず、日本の英語教育改革の動向を取り入れた研究を発表してきた。次の10年に向けて、益々大きく変化するであろう日本の英語教育の方向性について今まで以上に様々な提言を行っていくことができると確信している。

上智大学言語教育研究センター長・教授 / **ARCLE** 代表
吉田研作